

旧地形を巧みに使った食堂周辺の建物

史跡東大寺旧境内大炊殿跡推定地（奈良市雑司町）

東大寺大仏殿の北東部には食堂が置かれ、その奥には僧侶たちの食事をつくる「大炊殿」とよばれる建物があったと考えられています。大炊殿は、東西4間、南北11間の南北に長い建物として復原されており、現在は東大寺僧侶の住居である龍藏院と龍松院、駐車場になっています(図1)。平成24年度に、その駐車場で公共下水道工事に伴う発掘調査をおこなったところ、建物を建てるために山腹を切り開いて平地を造ったことや大量に出土した奈良時代の瓦の中に文字が刻印された瓦があることがわかりました。今回はこれらの遺構と瓦を紹介します。

1. みつかった遺構

現在の龍藏院と駐車場の高低差は約2.7mもあることから、大炊殿の建物跡は既に失われているという見方がありましたが、この発掘調査で奈良時代の土壇と築地塀跡・雨落ち溝・暗渠を発見しました(図2)。土壇は、山腹の斜面を平坦に削って、その上に固く締めた土を盛って築かれていました。全体規模は不明ですが、少なくとも東西7m以上、南北25m以上はあったと思われます。土壇の上では建物跡は発見できませんでしたが、西側の雨落ち溝から、土師器や須恵器の食器をはじめ甕などの調理具や貯蔵具、製塩土器等が多数出土しました。これらは、土壇上に建物が建っていたことを示すとともに、調理をする施設(=大炊殿)に関わる遺物であることを物語っています。また、過去の調査では、大仏殿の北側にある講堂と食堂をつなぐスロープ状の長い廊下の基壇や龍藏院の東端で食殿と呼ばれる礎石建物が発見されています。龍藏院と土壇とは高低差があることからわかるように、食堂周辺から講堂にかけてはもともと東から西へ傾斜する地形であったため、傾斜地を擁壁状に造成し、上段には食堂と食殿を、下段には大炊殿を建てたのではないのでしょうか。そして、上・下段の建物をつなぐ廊下も階段状あるいはスロープ状の廊下であったと思われる。

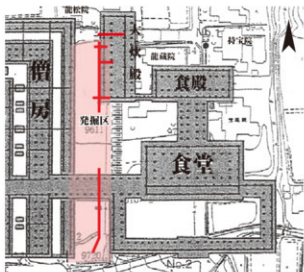


図1 東大寺伽藍復原図と発掘区位置図



図2 発掘区全景と遺構復原(南から)



図3 築地塀暗渠(西から) 図4 南北方向の築地塀基礎石(東南から)

2. 文字瓦 (図 6-1~6)

土壇・築地塀・雨落ち溝は、^{（五ノミ）}治承の兵火（1180年）が原因で壊されますが、土壇西側の雨落ち溝や整地土内から大量の瓦や土器が出土しました。瓦は丸瓦や平瓦が主体ですが、なかに「真依」（2点）、「六人」（2点）、「長」（2点）、「東」（3点）、「東大」（1点）の文字が刻印された瓦が合計10点ありました。「東大」は丸瓦の凹面に、それ以外はすべて平瓦の凹面に捺印されていました。「真依」「六人」は瓦工人の名前で、「東」「東大」は、東大寺を意味したものと考えられます。

こうした人名を刻印した瓦は、これまでに東大寺法華堂（三月堂）で使用されていることが知られ、^{（五ノミ）}恭仁宮跡・平城宮跡・平城京跡からも出土しています。さらに「六人」は、東大寺大仏殿の調査でもみつかっています。

「長」「東」（図 6-3~5）と同じ刻印の文字瓦は大仏殿回廊の調査から、3は食堂の調査からも出土しています。「東」「東大」などの刻印のある瓦は、東大寺造営時の瓦とみられます。

今回紹介した刻印の文字は、幅約2~3cmの細長い板に文字を彫って、焼く前の瓦に捺印したものです。凹面側に押す決まりがあったようですが、凹面での位置や文字の上下方向は一定しないため、とくに決まりがなかったことがうかがえます。



1. 「真依」 3. 「長」 5. 「東」



2. 「六人」 4. 「長」 6. 「東大」

図6 刻印のある文字瓦 (1~5: 陽刻文字, 6: 陰刻文字)

3. 恭仁宮式文字瓦 (図 6-1・2、図 7)

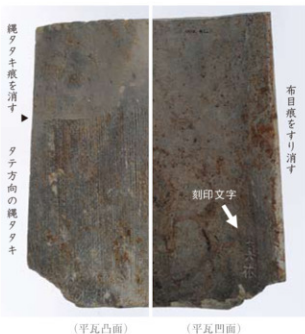
「真依」「六人」の刻印がある平瓦は、凹面の布目痕を丁寧にすり消し、凸面にタテ方向の縄タタキを施したのち、瓦の上端から約1/2~1/3幅のタタキ痕をヘラナデ等で消しています。これらは、天平12~15年(740~743)に恭仁宮の造営を契機として作られた瓦であると考えられており、「恭仁宮式文字瓦」と呼ばれています。

東大寺では法華堂に葺かれており、法華堂の創建時期を知る手がかりになっています。東大寺では他の建物には使用されていないと考えられていましたが、今回の発掘調査でもみつかったことから、大炊殿などの建物にも一部が使われていることがわかりました。

文字瓦は、瓦をつくった工房、供給した場所、遺跡の年代などを伝えてくれる興味深い資料です。



図5 瓦の出土状態



(平瓦凸面)

(平瓦凹面)

図7 恭仁宮式文字瓦